

勝ちに行くほど、いつの間にか、深い闇を背負う

勝ちに行っても、結局のところ負けます。田舎はこのような事例にこと欠きません。むしろ田舎はそのようなところ。受け入れがたくても「お互い様」という身の処し方がなければやっていけないところ。

最大の勝者と思われている、アメリカの実際を報告する好著があります。堤未果「(株)貧困大国アメリカ」(岩波新書 2013年6月刊)。よく売れているそうなので(出版社広告では20万部突破とか)、すでに読んだ方もいると思います。わかりにくいTPPも、この本を読めば概要がわかります。

「TPPなどやって来なくても、ここいらの農業は消えていく」というのが、近在の兼業農家の大方の意見です。「攻めの農業！」こんなスローガンとは無縁の底力が、農業を見限ろうとしています。食糧危機、経済破綻まで、あとどれほど時間が残されているのか。短ければ準備が間に合わず、長ければ、その間に農村の相当部分が失われることと思います。「買えなくなって思い知る」ではすまされそうもありません。世界中から底引き網で集められる情報を利用したり、人間心理や経済学に習熟すれば何かできるのでしょうか？ 科学は何か手助けをしてくれるのでしょうか？

この星で、光が届く場所は、いつでも薄皮一枚の半分です。闇の深さ広さを畏れます。人間は、これから先も変わらずそんな存在です。(晃)

栃木県茂木町から訪問あり

夫は、このところ毎朝、三尺ササゲのトンネルの中で、数種類のバッタや蝶やハチ、カメムシ、トンボやテントウムシ、アブラムシと、しゃべったり、やつついたり、大スズメバチに脅かされたりして、どんどん浮世離れして行くようです。すみません。

堤さんの著書には、貧しくて「配給券」で食事をする人が数千万人もいることや、家族経営や中小の企業農家が、借金漬けになったり、巨大アグリビジネスに吸収され低賃金農業労働者となっていくこと、地域の公的サービス(教育、消防、警察、医療、インフラなど)が崩壊していく様子が描かれていて、規制の緩和・撤廃後、むき出しにされた「自由」の猛威がアメリカを覆いつつある現実に、背筋が寒くなります。本の帯には「TPPは序章に過ぎなかった」とあります。

そのような情報と、毎日の畑仕事の落差で、くらくらするような夏の終わり、茂木町有機農業研究会の面々が、10名ほど来てくれました。茂木町は、10年以上前から、過疎の危機打開策として、町をあげて有機農業を推進していて、新規就農者の受け入れに熱心ということです。この日も、町のマイクロバスと運転手、事務局の農林課の職員が同行していました。うちのガラパゴス的農法とTPPうんちくのあとは、ちゃんと、近所のまんぷく農場さんの先進技術を見学されたようです。

三尺ササゲは、油で

息子の連れ合いの葉子さんが、付けてあったメモにある「みそ汁の具」というのに、使ったら、おいしくなかった。10年以上前に作ったままのメモで、すみません。あらためて、★三尺ササゲは、油と一緒に使ってください★と、もうほとんど手遅れながらお伝えします。みそ汁に入れるなら、さっと炒めてから、加えてください。おひたしも、おすすめできません。(9月9日 泰子)

